

銚子の歴史文化

1 ふるさとの生活

(1) 銚子の郷土料理(漁師の料理)

漁師の賄いは、銚子の郷土料理の原型といってもよいのではないのでしょうか。船上での食事は質素ですが、厳しい漁師の労働を支えるファストフードとしての合理性を求めたものと考えられます。

海上では揚がった魚をその場でさばき、内臓を取り海水で洗ってそのまま食べます。刺身やあらいなどの生食は、いろいろな魚でも可能です。

船上での調理が、いつしか漁師の家庭に持ち込まれ、だんだんメニューが増えたものと思われます。たたき系の調理については、イワシ、アジ、サンマなどを素材に、ねぎなどの薬味を使い、味噌仕立てにして食べるのが一般的です。

「なめろう」は、細かく刻み練るようにし、薬味はねぎのほかに好みで生姜などを使う人もいます。名称の由来は、「皿までなめたくなるほどうまい」などいくつかの説があるようです。

また、サンガ焼きというのは、はじめは「なめろう」をアワビなどの貝に詰めて焼いたものでした。それが今では、サンマをハンバーグのように焼いて出す飲食店もあります。

小型底魚のメヒカリは、さっと揚げ、熱いうちに丸ごとほおぼるのがうまいようです。地元の人たちの酒の肴としても、今でも人気の一品です。

ほかに今ではほとんど見られなくなりましたが、イルカの味噌煮があります。戦後間もない昭和30年代の頃は、銚子界隈の魚屋に、柵盛りで角切りのイルカが並んでいました。少し脂っぼい硬い皮の独特の歯触りを思い出します。

今でも銚子沖には、一年を通して、イルカの群れが豊富な餌を求めて集まります。利根川河口付近でも時々、小型の漁船と追いかけてこをするかのように泳ぐ、イルカの群れを見ることもできます。

保存を兼ねた食品として、干物があります。大量に獲れるイワシ、アジ、サンマを中心に、カワハギ、カレイ、トビウオ、イカなどの干物は朝食の定番です。これらの小型の魚は、丸干しやひらきにも重宝されます。今でも浜の近くでは、軒先で干物を作っている家庭もあります。

かつて、千葉県立銚子水産高校(現在、千葉県立銚子商業高校に統合)では、サンマの燻製を製造していました。無造作に新聞紙に包んで販売し、秋の人気食品として、多くの市民の食卓にのぼりました。

「かいそう」や「のげのり」は、銚子の名物です。「かいそう」は、最初に、海藻のコトジツノマタを天日干しにします。その後、水にもどして煮たものをバットに流し、冷やしたものを寒天状にします。これを長方形に切って、七味唐辛子などを薬味にして醤油で食べます。地元銚子では、出産後の女性を始め健康食品として食べられたも

のです。

銚子の浜で始まった「かいそう」づくりであり、今でも海岸に打ち上げられた海藻を集め、何種類かを混ぜて、その家独自の「かいそう」を作る家庭もあります。このような地域の小さな食文化の継承はほかにもあります。「のげのり」(フクロフノリ)は、乾燥食品で味噌汁や吸い物に入れて食べるとうまいといわれています。宴席では、湯がいて酢の物や刺身のつまに使われています。

私が子どもの頃に聞いた、「かいそう、かいそうッ」という売り声は、今でも耳に残っています。また、ハマグリに似た小さな貝を「ゼンナ、ゼンナッ」と声を張り上げ、川向うの波崎から自転車で来る行商人の姿も目に浮かびます。

(2) 大漁節

元治元年(1864)の春、銚子の浜は、空前のイワシ豊漁でわきたちました。白紙明神^{はくし}で大漁祭を催すことになり、飯貝根^{いがいね}や飯沼の網元、俳諧師^{とさわず}、常磐津師匠^{とさわず}、清元師匠^{きよもと}が集まり、作詞・作曲、振付けしたものを、祭礼で唄ったのが起こりといわれています。『千葉県の歴史 県史シリーズ 12』(山川出版社より一部引用)には、当時の銚子をイメージする、次のような歌詞が載っています。

一つとせ 一番ずつに積み立てて 川口乗り込む大矢声 この大漁船
 二つとせ 二間の沖から外川まで 続いて寄せ来る大鯛 この大漁船
 四つとせ 夜昼たいてもたき余る 三杯いっちょの大鯛 この大漁船
 五つとせ いつ来てみても干鯛場は あき間もすき間も更がない この大漁船
 七つとせ 名高き利根川高瀬舟 粕や油を積み送る この大漁船
 九つとせ この浦守る川口の 明神ご利益あらわるる この大漁船
 十とせ 十を重ねて百となる 千を飛び越す万漁年 この大漁船

(3) 子どもの遊び・トンボつり

「トンボとまれ、水戸屋のまんじゅう買ってやっから、トンボとまれ」と、トンボつりの子どもにまで唄われました。水戸屋は、創業を古く天明5年(1785)に発する菓子老舗で、太平洋戦争を境として昔日の面影を失いましたが、その評判は広く東総一帯に響きわたっていました。

いなかの男の子には、トンボは格別の昆虫でした。中でも一番人気はギンヤンマ。ヤンマといえばギンヤンマのことで、夕方、サツマイモ畑で、自作の直径50cm ぐらいの網を3・4mの竹竿の先につけた巨大な捕虫網(通称ヤンマダマ)を持って、ヤンマが来るのを待ったものです。

しかし、これだとなかなか捕まえられませんでした。ある時、近所の草地で巡回するヤンマを捕まえてから、わくわくするような遊びを見つけました。捕まえたメスを糸でくくり、おとりに飛ばすと、オスが寄ってくるのです。

そのうち、オスの腹部を絵の具で茶色にぬり、偽装して飛ばすとオスを何匹も捕まえることができました。昭和30・40年代頃まで、銚子の住宅地周辺には、ヤンマが縄張りにする草地がいくつもありました。